

文学部における「Basic English」

教員の連携及び共通科目の標準化

ジェムズ・ベネマ、ダグラス・ジャレル

“Basic English” in the Faculty of Literature: Standardizing and Coordinating a General Education Course

James VENEMA and Douglas JARRELL

1. はじめに

名古屋女子大学では、「Basic English 1,2」、「Advanced English 1,2」、「総合英語A 1,2」、「総合英語B 1,2」という8つの英語科目が文学部と家政学部の両学部にあたがる「全学共通科目」として設けられている。ここ数年、最初の2つは外国人教員が担当しており、後の2つは日本人教員が担当している。本論では1年生の必修科目である「Basic English 1, 2」の問題点を考慮したうえで、2年前から推進している改善策について述べることにする。なお、家政学部に関しては今回の改善策への対象からはずすことにした。これは、大学所属の専任英語教員は全員天白学舎にいたため、別キャンパスである汐路学舎にある家政学部の共通科目を担当している非常勤講師との連携が十分取れないという事情による。

平成16年度から「Basic English 1,2」と2年生の「Advanced English 1,2」を見直すきっかけになったのは、英語教育FDの一環として授業内容の現状把握を行ったことだった。共通科目である以上一定の力を保証するのは大学英語教育の義務であると考えられるが、これらの授業科目には一貫性は見られなかった。1年生の前期に実施する「Basic English 1」、後期に実施する「Basic English 2」から改善を始めたので、本論ではこの2科目を対象を絞って述べることにする。

2. 平成15年度までの英語共通科目の実態

2年前に「Basic English 1,2」、「Advanced English 1,2」の内容について、シラバスを読んだり担当教員に聞いたりして調査したところ、内容のバラつきが目立ち、さらに1年から2年に進む際に、「Basic English」で習得した英語を意識しながら「Advanced English」の授業内容を深めるというような過程は見られなかった。この背景には、担当教員がほとんど非常勤講師であり、学科の専門科目と異なり共通科目は英語専任教員との関わりが薄かったことが挙げられる。非常勤教員の努力によって学生は効果的な英語指導を受けていたと推察されるが、具体的に学生がいかなる内容を学び、いかなる英語のスキルを習得したのかについては把握できない状況だった。このようなカリキュラムが提供する教育環境では学生の英語力を保証することは不可能である。また英語共通科目の目標設定を行わなければ、学生のニーズが仮に把握されていたとしても、そのニーズに応えることはできない。

3. 学生のニーズ

学生のニーズに応えるには、学生の既存の英語力及び学生の専門分野で要求される英語力を把握する必要がある。文学部ではほとんどの学生が中学校から大学入学時までに6年間英語教育を受けている。この6年間に渡る英語の蓄積の多寡を数量で表すことは難しいかもしれないが、蓄積自体があることに変わりはない。

名古屋女子大学総合科学研究所の機関研究の一環として平成14年度に英語教育に対する全学アンケート調査が行われた。報告書が示すように、文学部及び家政学部では学生の多くは英語の授業に対して「話す力」、「聞く力」がつく授業を望んでいるという結果であった。本論の両筆者も学生から同じようなことをしばしば聞く。もっと話す力を伸ばしたいという要望である。特に外国人が担当する授業では、学生の関心は「話す力」、「聞く力」に傾いている。

高校で学習する英語は主に受験のためなので、高校生は普通の会話で使える英語をあまり覚えていない。その一方で、大学入試に出てくる複雑な文を読み解くために難しい語彙を何百語も暗記し、作文にしか使わない文法のルールを一所懸命に覚えているのである。したがって、入試には合格できても、実際に人とコミュニケーションをとることになると、多くの学生は簡単な英会話さえできないのが現状である。入試のための勉強は学生がもっとも要求しているコミュニケーション能力に明らかに結びついていない。やはり大学の英語教育は真のコミュニケーション能力を育成することに意義があると言える。

現在の外国語教育の主流であるCommunicative Language Teaching (CTL) はコミュニケーション能力の育成を前面に出している理論であり、CTLの主張は次のように書かれている。

- (1) 言語は、それを実際に使用することによって、最も効果的に習得される。
- (2) したがって、言語の授業では、生徒が目標言語を実際に使用して情報や意味を伝達し合う活動が中心となるべきである。
- (3) コミュニケーションは、伝達の目的やニーズがないところには起こらない。つまり、互いに相手が何を言うか、あらかじめわかっているとしたら、コミュニケーションは生起しない。
- (4) したがって、伝達の目的やニーズを教室にどうつくるかがコミュニケーション活動の成否の鍵を握る。
- (5) 伝達の目的やニーズは、ギャップの原理によって生み出される。つまり、お互いが持つ情報や意見にギャップがある時に、それを埋めようとして伝達の必要が生まれる。
- (6) コミュニケーション活動の成否は、伝達目的が果たされたかどうか、伝達ニーズが充足されたかどうかで判断すべきである。

(三浦他3-4)

4. 外国人教員のニーズ

平成17年度まで2年生以上の科目を受け持っていた外国人教員は難題を抱えていた。それは、1年生で学んできた内容、英語運用力のレベルを想定することがまったくできなかったことである。特に問題であった点は、基本的な会話にまったく参加できず、簡単な質問でさえ答えられない学生もいたことだ。話せない理由は単なる英語力不足ではなく、外国語で話すことから

生じるストレスに起因することも予測できる。この現状を踏まえると「Basic English 1,2」の目標は、会話に必要な英語の語彙及び文法の復習を兼ねながら、外国語で話す自信を与えることになる。英語が話せない原因が、授業や受験で失敗を恐れ、情意フィルターを高くしたことであれば、そのフィルターを下げる方法を見つけないといけない。学生にとって居心地のいい環境を作れば、情意フィルターを下げることになり、既存の英語力を学生から引き出し、それが真のコミュニケーション活動に役立つことを学生に示せば、学生は安心して話せるようになる。「タスク学習」を提案するウィリス（イギリスの言語学者）が上記の三浦と同様、語学習得の条件としてあげているのは言語の使用である。「Basic English 1,2」はウィリスの言う「社会的な交流をする」場となりえるのではないだろうか。

学習者には、自分が言いたいことを伝えたり、感じていることや考えていることを表現する機会が必要である。ことばを本当の目的を持って（例えば、物事を成し遂げるためや、経験を共有したり、社会的な交流をしたりするために）使えば、すでに知っている表現を思い出して使う機会が持てる。重要なのは、あまり自信のない学習者がいる場合には、前向きで、お互いを支えあう、重圧感のない雰囲気を作り出して、創造性を発揮させたり、どんどんチャレンジしてみる気持ちにさせることである。

（ウィリス16）

5. 「Basic English」の新シラバス

平成17年から下記の新シラバスに基づいて始まった「Basic English 1, 2」はCTLの理論に基づいて作られたものである。

（1）「Basic English」の新シラバス

到達目的：簡単な会話が英語でできるようになる。

授業計画：学生は授業中に

- ① 会話に関する基本となるスキルを習得する。（下記のチェックリストに参照）
- ② 学生同士の会話が成り立つような授業中の準備活動も含まれる。
- ③ 準備した会話をペアで、何人かの学生と練習する。
- ④ B5ノートを持参し、その日その日の話題に関する質問、答えなどを書く。

成績評価方法：口頭期末試験の成績¹、授業中の積極性の評価、ノートの評価

学習上の留意事項：授業外も英語で話す機会をつくること。学期中一回以上カンパセーションサロン²へ行って、カンパセーションパートナーと英語で話すこと。

6. 「Basic English」チェックリストの活用

学生はしばしばシラバスを読まずに授業に出席し、期末試験のためだけに勉強し、単位が取得できれば満足する。このような学習プロセスでは英語を上達させることは極めて難しい。学生に英語の勉強を頑張ってもらうように、最初の授業で、15回の授業を通じてどのような力が付くかという明確な到達目標を提示する。「Basic English 1,2」の到達目標は、さまざまな身近な話題（家族、アルバイトなど）について英語で5分間話し続けられる力をつけることである。この目標をさらに明確にしたのが、学生全員に配布される、次の「英語運用能力と授業中

の課題のチェックリスト」である。

(1) 「目指す英語運用能力に関するチェックリスト」

- ① 学生は (a) 日本語を使わずに、(b) 止まらずに、授業で取り扱ってきたすべての話題についてペアになって英語で5分間話せるか。
- ② 授業で取り扱ってきたすべての話題に対して10以上の質問に答えられるか。
- ③ 取り扱ってきたすべての話題に対して、すらすらと正確に4つ以上の質問が作れるか。
- ④ 会話が進むにつれ、質問に対して短い答え方でなく、話が発展するような答え方ができるか。
- ⑤ 会話をしながら相手の発話に対して関連した質問ができるか。
- ⑥ “What about you?” という表現を使って、自分が聞かれたことを逆に相手に聞き返すことができるか。
- ⑦ 最もよく使われるクラスルーム・イングリッシュを知っているか。よく使われる質問はノートの1ページ目にメモしてあるか。
- ⑧ 知らない英語の表現がある場合は、教員に助けを求めることができるか。
- ⑨ 語彙や表現が英語で言えない場合、もっと簡単な英語を使ったり、ジェスチャーを使ったりして説明できるか。
- ⑩ 「Basic English 2」を受講する段階において、「Basic English 1」を履修した時よりも英会話力がついているか。

(2) 「教室での活動に関するチェックリスト」

- ① 毎回授業中に指定された課題に関する会話に積極的に取り組んでいるか。
- ② 授業中、話す相手の名前をノートに書き込み、学期が進むにつれてその相手から得た情報を付け加えているか。
- ③ 各話題について話し合った時に出てきた質問を10以上ノートに書き写しているか。その質問の正確さが教員に確認されたか。

7. 授業の進め方

「Basic English」ではテキストを使わない。そこで、教員相互が連携を保つために、教授法及び授業の進行方法に関して説明する責任が生じる。教員、学生の役割を明確にすることによって、「Basic English」の運営体制をより分かりやすい形で提示することができる。授業運営の体制は下記のようになっている。

まず教員に心がけてもらうのは、学生同士が会話に取り組めるように時間をたくさん与えることである。そのため、教員が教壇に立って、全員に向かって話す時間を最小限にとどめる必要がある。授業形式は今まで体験されてきた授業とは違うので、「Basic English」の最初の授業で学生に対するしっかりしたオリエンテーションが必要である。学生に説明するのは、だれでも既存の英語力があり、その既存の知識をアクセスし英語を練習すれば、英語が話せるようになる、ということである。授業中、会話活動は簡単な話題に基づいて行われる。学生が常に少人数グループになり、教員の助けを求めながら会話の準備をし、準備が完了するとペアになって会話を行う。複数の相手と同じ話題について何回も何回も話し合うことによって英語の滑ら

かさが生まれてくる。「Basic English 1」、「Basic English 2」の狙いは英語を「話す力」、「聞く力」なので、それにふさわしい試験を最後に用意する。

他の英語スキル科目と違って、「Basic English」のクラスは能力別に分けられていない。既存の英語力を引き出すための科目なので、テキストを使ったほかのスキル科目のように、学生の英語力の差が悪い影響を及ぼす心配はほとんどない。逆に学生同士の真のコミュニケーションから互いにとって価値のある情報を引き出すことができると考えられる。学生はだれもが共有できる情報である「家族」、「住んでいる町」といった身近な話題から始まるので、「内容が分からない！何を言えばいいか分からない！」というようなパニックに陥る学生はほとんどいない。このような平凡な話題を選ぶことにより、情意フィルターを下げることができる。

「Basic English 1」では、教員がその日の話題を提供し、それについて学生に考えさせ、会話練習をさせる。「Basic English 2」へ進んだ段階では、すでに学生が授業形式に慣れているので、なるべく話題の選択は学生に任せる。学生に責任を与えることにより、学生が授業に関心を寄せ、もっと真剣に取り組むようになると考えられる。

まず英語で授業運営が成り立つように、“How do you say ... in English?”「英語で～はどのように言いますか？」“What does ... mean?”「～はどういう意味ですか？」“How do you spell...?”「～のつづりは？」“Can I say ... in English?”「英語で～言えますか？」“Could you repeat that?”「もう一度言って下さい」などのクラスルーム・イングリッシュを教える。

新しい話題に出会うと、学生は意見を出し合いやすいように少人数グループに分かれる。話す内容を自分自身で決めていくことがポイントである。この時の教員の役割は、表現を一方向的に教えるのではなく、学生の準備活動を支えることである。

質問作りは会話を始める重要なスキルである。あらゆる話題に対して適切で分かりやすい質問を作れる能力を養うのは「Basic English」の一つの重要な狙いである。ただし、正確さを無視して質問及び会話練習を続けると、学生の誤りが固定してしまう恐れがある。文法の規則に合った質問を作らせるには、教員の力を借りる必要がある。学生が教員を言語のソース(源)として利用できるように、英語の意味や適切な表現を確認する方法を教え、学生に定期的に質問させるように指導する。

教員の大きな役割は個人個人にアドバイスを与えることであるが、教壇に立って全員に対して教える場面も当然ある。頻繁に起こる誤りがあるので、これに対しては全員に対して注意を与え、ドリルを行なう。例えば「家族」という話題について取り上げると、多くの学生が“I have four families”と言うが、“There are four people in my family”という正しい表現を覚えさせる必要がある。全員に正しい発音やイントネーションを繰り返すような活動を行わせるのも教員の役割である。英語の滑らかさに学生を導くには、練習の繰り返しが欠かせないと考えられている。

授業中にテキストを使わず、話す内容を学生に決めてもらうという授業の進め方から、復習する方法が見えてこないと訝る読者もいるであろう。実は、ノートに書き込むことが、「Basic English」の学習の一環として重要な手段となっているのである。各話題に関する質問、話した内容、正しい言い方などを丁寧にノートに記述することにより、学生が復習できる教材が出来上がる。ノートは、正確さを確認するためだけではなく、真のコミュニケーションを成り立たせるためにも役立つ。1 クラスには25-30人の見知らぬ学生が集まっているが、授業を通じて互いに知り合いになることは、「Basic English」のもう一つの重要な狙いである。三浦が上記文献で言っているように、コミュニケーションは「ギャップの原理によって生み出される」。

毎回違う学生と話し合うことにより、他人から新しい情報を得、だんだんと知り合いが増えていく。全学生に関するメモをノートに記入するように指示すれば、全員を相手にすることになり、英語の授業はウィリスの言う「社会的な交流の場」になる。

8. 口頭試験

明確で分かりやすい到達目標を学生に示し、その目標に基づく口頭試験で評価を出すことは、学生に刺激を与え、授業の参加態度を向上させることに貢献する。学生は授業中の会話練習の意義が理解でき、会話練習をすればするほどコミュニケーション能力がつくことが分かるので、多くの学生にとって英語で話す自信につながる。

学生に一定の力がついているかどうかを測定するために、標準化された口頭試験を導入した。試験を実施するのは授業担当者ではなく、「Basic English」を担当している他の教員である。学生が知らない試験官であれば、より客観的な評価が得られるとの考えに基づくものである。2年前から基準を設け、それに基づいて試験を実施している（付録1と参照）。教員は、試験官として口答試験を実施する前に、ビデオに収められた口頭試験の場面を見て、評価する練習を行なっている。評価基準に近づくように場面相互の比較を行い、一定の標準化が保てるようにしている。

9. 結論

「Basic English」の新しい教授方法を導入してすでに2年半が経過し、ある程度の結論が出せるように思う。学生の授業評価を見ると、「Basic English」の評価は常に高く、学生にとって授業内容は興味深いものであり、授業そのものが役に立っていることがわかる。一方、数人の学生にとって授業の目標が十分明確になっていないことから、目標を分かりやすくすべく、平成18年度の後期から「チェックリスト」に全授業終了後までに習得すべきスキルをリストアップして配布している。来年度の新入生のための「チェックリスト」は日本語で作成する予定である。

常勤教員からも非常勤講師からも「分かりやすく、準備及び指導のしやすい授業である」との反応が得られている。授業の到達目標を明確にし、宿題及び授業中の活動責任をはっきりさせることにより、学生の授業態度が改善されてきた。学生が会話に取り組もうとする熱意は上昇しており、毎回教員にアドバイスを求める学生はほぼ全員となった。

「Basic English」の新しい運営方法は成功していると考えられるが、弱点がないとは言えない。口答試験のような評価システムには柔軟性が欠けており、中立性が強く出ているため、母語でもコミュニケーションが取れない学生にとっては、大変な負担となる授業になりかねない。数は少ないが、言葉の問題よりも、教員と学生との感情的な問題が多く発生している現状もある。このような問題を含めて「Basic English」のさらなる改善を図るべく努力していきたい。

¹ 口頭期末試験とは、試験当日、教員が学生同士のペアの選抜をし、学期中に練習してきた話題の中から1つを無作為に選択し、その話題について学生に会話をさせるものである。この方法によって測るのは暗記力ではなく、自発的なコミュニケーション能力である。

- ² カンバセーションサロンとは、英語及び第2外国語で話す機会を学生に与えるため専用のトーキングルームで外国人が待機し、話したい学生の相手をするものである。

10. 参考文献

1. 三浦 孝、池岡 慎、中嶋洋一『ヒューマンな英語授業がしたい！』（研究社、2006）
2. ジェーン・ウィリス『タスクが開く新しい英語教育』（開隆堂出版、2006）

付録1 「試験実施要項」

成績	発音とイントネーション	参加・努力	滑らかさ	質問・回答	言葉の使い方	合計
A	分かりやすく、英語らしい発音になっている。 適切な表現が使える、イントネーションも適切である。	ボディランゲージにより興味が沸いていることが分かり、会話が成り立つように努力していることがわかる。 返事の表現力が豊かである。	ほとんどポーズをせずに、話せる。相手の話が止まったりすると、その間を上手く埋める。	適切な質問をするし、相手の返事に合わせていつもフォローアップ質問をする。 相手の返事を考慮し、話題をもっと深く追求することがある。	授業で習ってきた英語を問題なく使える。その上、もっと高度な英語に挑戦することもある。	23点以上
B	カタカナ発音が混ざっているが、イントネーションが適切で、少し努力すれば聞き取れる。	ボディランゲージにより相手の話に興味を示していることが分かる。返事の表現力は少し欠けているし、返事は適切ではないこともある。	ほとんどスムーズに話せるが、時々ポーズしたりする。相手の話が止まったら、その間を埋めようとする。ただし相手に頼る傾向が見られる。	質問をし、相手の返事に合わせてフォローアップ質問をすることもある。大体話題に沿って話す。	授業で習ってきた英語を間違えても使っている。分からないところがあるがすこし目立つ。	16-22点
C	単調な話し方を使ってカタカナ発音がほとんどなので、分かりにくい。	ボディランゲージにより相手の話に興味を示していることはあまり分からない。返事そのものも少ない。	長いポーズが目立つが、何とか会話に参加できる。相手にかなり頼る姿勢が見られる。	質問を最小限にとどまし、手短かな返事が多い。会話を続けさせるようにあまり努力しない。	授業で習った英語をよく間違えるし、分からないところが多いけれども、何とかコミュニケーションが成り立つ。	8-15点
D	非常に聞き取りにくい。	ボディランゲージにより相手の話に興味を示していない。相手の話に対する反応がない。	会話に参加できるほど話せない。	質問をすることも、答えることもほとんどできない。	質問も返事もほとんどできない。	8点以下
※ A = 6点 A/B = 5点 B/C = 4点 C/D = 3点 D = 0点						